

## 「トロイアの木馬」異聞

——イスマイル・カダレ『怪物』におけるホメーロス解釈——

井 浦 伊 知 郎

Another Explanation of The Trojan Horse  
meditated in Ismail Kadare's novel *The Monster*

Ichiro Iura

### 0. 序

#### 0.1. イスマイル・カダレとは誰か

イスマイル・カダレ (Ismail Kadare 1936～) は第二次世界大戦後のアルバニアを代表する作家の一人であり、同国出身の作家で国際的に評価されているほとんど唯一の人物である。

カダレは1936年にアルバニア南部のジロカスタル (Gjirokastrë) に生まれた。当時イタリアとドイツの占領下にあったアルバニアは、パルティザンが1944年11月に全土を解放、共産党 (後に労働党) の一党体制下で社会主義国として戦後の半世紀を (1991年3月まで) 歩むことになる。カダレは1958年にティラナ大学の文学・歴史学科を卒業後、モスクワのゴーリキー文学研究所に留学。しかし1960年代に入るとアルバニアとソ連の関係が悪化、他のアルバニア人留学生と共に帰国を余儀なくされる。<sup>1)</sup>

帰国後はジャーナリストとして活動するかたわら、詩や小説を発表、1963年『死せる軍隊の將軍』で注目される。作品は多くの言語に翻訳されており、2004年の時点で35言語、刊行点数637に達する。作家芸術家同盟や民主戦線 (党の大衆翼賛組織) 等の要職にあった一方、作品はしばしば保守派の批判を受け、幾つかの作品は1990年代に入るまで発表を認められなかった (本稿で取り上げる『怪物』もその一つ)。<sup>2)</sup>

経済状況が悪化し市民の国外脱出が相次いだ1990年から1991年にかけて党指導部を公然と批判、フランス<sup>3)</sup>へ亡命したが、間もなくアルバニアに戻り現在は首都ティラナで生活している。旧「東欧」の所謂「反体制知識人」と異なり、カダレは自分が“dissident”であったことはないとも発言しているが、その評価が社会主義時代から今日に至るまでほとんど変わっていない点でも稀有な存在と言えよう。

#### 0.2. その作品

カダレの作品には幾つかの傾向がある (カダレは詩人としても有名だが、本稿では散文のみ扱う)。まず、戦後またはごく近い過去のアルバニアを扱った作品群である。先に述べた『死せる軍隊の將軍』は、第二次世界大戦後に遺骨収集のためアルバニアを訪れた外国人「將軍」と地元アルバニア人のやりとりを描き、著者を一躍有名に<sup>4)</sup>した。戦後の新しい社会や人間像を描いた『婚礼』(1968 旧題『太鼓の皮』)、出身地ジロカスタルを舞台とする自伝的小説『石の年代記』(1971) や『広告のない町』(1959 発表年2001) 等もここに含まれる。

他方で、直近の政治情勢を扱った長編群が存在する。ソ連との国交断絶直前の世界を舞台にした作品『大いなる孤独の冬』(1973)、中国とアルバニアの関係悪化を題材にした『コンサート』(1988)等がこれにあたる。特に『大いなる孤独の冬』(増補改訂の上1977年に『大いなる冬』と題して再刊)は、その壮大なスケールと精緻な人物描写からカダレの最大作にして最代表作と呼ばれる。

逆に中世以前にさかのぼり、因習や民間伝承に題材を取った作品もある。『城』(1970)、『三本柱の橋』(1978)、『裂けた四月』(1980)、『誰がドルンチナを連れ戻したか』(1981)等がこれにあたる。これらはしばしば不可解にして不条理かつ幻想的な展開を見せ、その作風はしばしばカフカ<sup>5)</sup>と比較される。

さらにカダレの小説には、現実とはまったく別の時間や空間を舞台としたものも少なくない。その舞台の多くは、オスマン帝政期のバルカン、古代ギリシア、そしてエジプトである。『アイスキュロス、この偉大なる敗北者』(1990)、『凶夢』(1991)、『ピラミッド』(1993)、『夢宮殿』(1995)等が挙げられる。特にギリシア世界、とりわけ古代の作家(特にホメーロスとアイスキュロス)や神話伝説中の人物は頻繁に登場し、重要な役割を演じている。

これについては(党や政府を直接取り上げることが憚られる)かつての出版統制を意識した点もあったろうが、時空を超える幻想的な描写は作品の多義的な読みを可能にし、アルバニア固有の事情に限定されない普遍的なテーマ<sup>6)</sup>を展開させることに成功している。それこそがカダレの国際的な評価につながっており、2005年にはイギリス最高の文学賞「マン・ブッカー賞」で初の受賞者となった他、ノーベル文学賞候補にもその名を幾度となく連ねている。最近では、ダンテやシェイクスピアに着想を得た作品を発表している他、コソヴォ情勢についても積極的な発言を行っている。

### 0.3. 『怪物』の成立と出版の経過、本稿の目的

本稿で扱う『怪物 (Përbindëshi)』は、『広告のない町』『死せる軍隊の将軍』に続いて発表された。小説としては3作目にあたる。比較的オーソドックスな形式だった前2作(自伝的小説、戦後アルバニアを舞台とする現代小説)に対し、この3作目では全く新しい枠組が提示されている。ひとことで言えば、ホメーロスの世界を現代の視点から書き直すという作業である(あらすじは次節)。

この意欲的な作品は、まずアルバニアの文芸雑誌「11月 (Nëntori)」の1965年12月号に短縮版で掲載されるが、すぐさま発行禁止<sup>7)</sup>となった。以後、四半世紀にわたって『怪物』は日の目を見ることがなかった。最初の出版はアルバニアの政治的体制転換直前の1990年であり、しかも版元はアルバニアでなくユーゴスラヴィア・コソヴォ自治州(当時)の出版社<sup>8)</sup>だった。アルバニアでは翌1991年に作家芸術家同盟から出版されたが、初出時に比べて大幅に改稿されている。同年フランス語版が翻訳出版され、1998年のフランス版『全集』(フランス語とアルバニア語の両言語で収録)が決定稿とされている。

『怪物』はカダレの初期作の一つであり、後に発展する神話的・幻想的作品世界のプロトタイプとも言える。そこには若きカダレ(発表時29歳)の独創的な試みがあふれているにもかかわらず、先に述べた複雑な事情もあってか、他作品に比べてそれほど多くの言語に翻訳されておらず<sup>9)</sup>、十分に研究されているとはいいがたい(日本に限って言えば、そもそも全く知られていない)。本稿ではこの『怪物』について、その中で描かれるトロイア戦争、特に「トロイアの木馬」作戦と、その中に現れるホメーロス(ただし我々の知るホメーロスと同一ではない。後述)に焦点を絞って考察したい。

## 1. 『怪物』のあらすじ

### 1.1. 失われた世代

舞台は、対ソ関係が悪化し、留学生が一齐に帰国を余儀なくされた直後の1960年代アルバニア。そんな帰国組の1人гент・ルヴィナ（Gent Ruvina）は、学生のパーティでレナ（Lena ヘレナHelenaの愛称）と名乗るブロンドの女性と知り合う。折しもアルバニアでは「トロイアの木馬」と題する外国映画（おそらく1956年の米映画「トロイのヘレン」）が上映されていた頃で、彼女は周囲から「トロイアのヘレナ」と呼ばれている（アルバニア語では『ヘレナ』も『ヘレネー』もHelena）。レナは博物館に勤める（古代の武具を扱っているらしい）男性と婚約直前だったが、гентはその婚約パーティの夜にレナを連れ出す。同棲を始めた2人にはレナの婚約者から脅迫状が届き始めるが、そのくだりは次のように書かれている。（以下、引用は特にことわらない限り、フランス版およびアルバニア版全集より井浦訳）

レナの元婚約者の家族からは電報が届いていて、その電報を追う形で、彼女の返還を要求する脅迫の手紙も来ていたからだ。かくしてプリアモスは逃亡者の引き渡しを要求された。

プリアモスとはトロイア王の名である。早くも序盤から、物語はトロイアの悲劇と重複し始める。絶世の美女ヘレネー（ヘレナ／レナ）をトロイアへ連れ去ったパリス（гент）、困惑するプリアモス（гентの父）、そして奪われた妻を求めトロイアへの復讐を誓うメネラーオス（レナの婚約者）というわけだ。

### 1.2. 木馬の陰謀

一方、首都ティラナの郊外には古びた有蓋トラックが放置されている。そこにはトラックを「木馬（Kali i drunjtë）」と呼ぶ男たちが隠れている。リーダー格は「オデュッセウス・K」と呼ばれ、他に「アカマース」、「マックス」、「ロベルト」、「ミロシュ」、「（木馬の）設計士」と呼ばれる男たち<sup>10)</sup>がいる。

彼らは都心部へのテロ攻撃を画策しているが、各人の参加動機は様々で、それぞれの中に何かしら陰鬱なものを抱え込み、絶えず不眠や焦燥感に悩まされている。また「マックス」こそ実はレナの婚約者その人で、破壊活動に乗じてレナの殺害をもくろんでいる。前節との比較で言えば、このマックスこそトロイア戦争におけるメネラーオスである。単なる中古トラックが彼らにとっての「木馬」となるまでの経緯は、主に「設計士」の目を通して語られるが、そのやりとりは、ホメーロス『オデュッセイアー』やクイントゥス『トロイア戦記』<sup>11)</sup>中の「木馬作戦」の顛末をなぞっている。

一方彼らの動向とは全く無関係に、主人公гентは大学で「トロイアの木馬」をめぐる学説について研究している。гентとレナの会話の中にも「木馬」が出現し、さらに二人のやりとりはしばしばгент個人の妄想によってかわられる（原文ではフォークナーの『響きと怒り』よろしく字体も口調も異なる文が入り乱れる）。加えて、こうした現代アルバニアの人々の動向と（一見）関係なく、古代ギリシア世界の物語が突如割り込み、交錯する。その錯綜の結末（らしきもの）については本稿の最後で述べることにして、次章では「トロイアの木馬」をめぐる主人公гентの様々な思索について、具体的に見ていこう。

## 2. 『怪物』における「トロイア陥落」

### 2.1. 主人公の試行錯誤

アルバニアの報道機関が敵対陣営（米国ともソ連ともとれる）の動向に「トロイアの木馬」なる常套句を用いるような不穏な雰囲気の中、гентは（レナの婚約者に対するぼんやりとした怖れを抱きながらも）自分の学位論文のために作ったメモから「トロイア陥落」の真相を解き明かす作業に没頭する。<sup>12)</sup>

そんな衝動が最初に芽生えたのは、彼がモスクワにいる時のことだった。[略] 彼が市当局のトラックのことを書き始めたのも偶然ではなかった。不思議なことだが、そのトラックに一頭の馬の姿が重なったように見えたのだ。

ふと、彼は或ることに気がついた。古代の出来事に疑念をめぐらしていると、トロイアの悲劇の結末が変わってしまうような気がしてきたのだ。

гентの思考実験のきっかけとなった疑問点は次の2点にある。そもそも「木馬」と言われるようなものが実在したのか？ 仮に実在したとして、それが「トロイア陥落」という出来事に——様々な叙事詩で語られているほどの——役割を持っていたのか？

本当に木馬が存在し、本当にギリシア人たちはその木馬によってトロイアを手中にしたのだろうか？ それともそれは、真のトロイア侵攻策から目をそらすための偽装工作に過ぎなかったのではないのか？

それは別に驚くようなことではなかった。とうの昔から知られていることだが、戦争の本当の原因も戦闘の開始も、戦力についての推測や推理さえも注意深く包み隠されており、ギリシア・トロイア戦争に関する記録は、一人の美女〔訳注；ヘレネー〕による空騒ぎの物語（彼女の恋の遍歴は実際にあったのかも知れないが）にすりかえられてしまったのだ。

そこで彼は、諸説を集めて再検討を開始する。

トロイアを陥落させたのは馬型の城壁破壊装置だったと書いている者もいたし、馬の絵を描いた隠し扉があって、そこを通して市中に潜入したと説く者もいた。あるいは、馬は扉でなくギリシア兵の衣服に描かれており、救いようなない暗闇の中で互いを見分けられるようになっていたとも言われる。

他にもいろいろな説があった。馬は、ギリシア軍の殺戮をまぬがれたトロイア人<sup>13)</sup>の家々の玄関に描かれた絵だったとか、ギリシア軍はトロイア側を欺くために宿営地を焼き払ってヒッピオス山（Hippios）へ隠れたが、その名が「馬（hippos）」を意味しているからだろうとか、しまいには、トロイアは騎馬部隊の攻撃によって陥落したのだという説まであった。

しかしгентはいずれの説にも納得しない。彼の最初の仮説はこうである。

木馬などなかったと考えてよいのかも知れない。それに対する反論はあるが、木馬が存在したと言っているのは、逃げ去ったトロイア人だけなのだから。

また別の説だが、木馬は存在しなかったにしても、何かしら基本的に似たようなものがあったということも考えられる。その場合は、その象徴的な存在が何ものだったのかを解き明かさねばならない。

さらにまた別の説もある。木馬は実在するが、それは真実を隠蔽するためのものに過ぎなかったのではないか、という推理だ。要するに、木馬は存在し、かつ同時に存在しなかった。この第三の説が、一番ありそうように思われた。[略]

そもそも、「木馬」が存在したとして、幾多の戦闘を得て経験を重ねてきた都市であるトロイ

アが、一頭の木馬ごときにうかうかと騙されるなどという話があるだろうか？そんな疑問がゲントの脳裏を離れない。そんな中、彼は『オデュッセイアー』の或る記述に驚愕する。

「そんな馬鹿な！」

メモを手にした彼の口から、そんな言葉が飛び出した。そして彼はそれを幾度か繰り返した。

そこに書きつけたことがらを目にしている間じゅう、自分が同じ言葉を際限なく言い続けるような気がした。確かに、ホメーロスが『オデュッセイアー』の第4章で次のように書いているのには、驚くほかなかったのだ：「木馬の中に、我ら指揮官が潜んでいたその時、ヘレネーよ、おまえが来合わせたのだ」

カダレは上のよう書いているが、ここで原典を正確に引用しておこう。『オデュッセイアー』4章271～274節で、メネラーオスはヘレネーに対して次のように語っている。

たとえばまたこの仕事にしろ、あの剛勇のつわものは、よく磨いた木馬に入り込み、大胆にもやりおおせた、そこへわれわれアルゴス勢の、みな選り抜きの勇士が揃って坐り込み、トロイア方に殺戮と死をもたらしただが、その折そなたも来合わせた。(呉茂一訳)

ちなみにこれは木馬がトロイアへ運び込まれる前夜の出来事である。ヘレネーは木馬の周りを三度回って、中に潜むギリシア兵たちに、それぞれの妻の声色で呼びかける(メネラーオスとディオメデースに至っては、あやうく返事をしそうになってオデュッセウスに止められる)のだが、ゲントはこれを「疑う余地なく、世界史の中でも際立って非合理的な出来事」だと断定する。

トロイア勢は、まず木馬に穴をあけて中に隠れている鳩を見ようとした。ところが急に、自分たちが子どもじみた鬼ごっこをやっているような気分になり、またギリシア兵たちがヘレネーの誘惑に乗って返事をしなかったものだから、トロイア勢は木馬の中にギリシア勢がいないものと信じ込み、その不吉な品を市中へと引き入れた。

だがそんな話を信じるなど、実に声をあげたくなるような勘違いではないか。だからこそ、内部にギリシア兵が隠れる木馬として語り伝えられるようなものは、存在しなかったのだ。

ゲントは、「木製の馬」の背後に「大いなる策略」があり、「木製の馬」は——実在したとしても——あくまでそのカムフラージュに過ぎないのではないかと見る。それは、トロイア戦争におけるギリシア側の正当性を歴史に残すためのものであり、長期にわたるトロイア戦争の中で、繰り返される交渉の決裂と再開、双方の陣営内部での分裂や権力闘争がそうした流れを作り出したのである、と。

トロイア陥落のための悪魔のような方策を立てた時、あるいは「大いなる策略」と呼ぶところのものを見出した時、ギリシア側の指揮官たちは即座に、この「大いなる策略」は極秘裡に、あるいは偽装しておかれるべきとの意見で一致したのだ。[略]

隠蔽工作は第一に、無数のギリシア兵に対して為されるべき問題なのだが、その彼らはトロイアの地から帰還した後でさえ、そこで起こった事実をまったく知らず、本当に「木製の馬」によってトロイアを陥落させたと思いついていたのだ。彼らはそのようなうそいつわりを、それがうそいつわりだという自覚すらないままに、ギリシアやバルカン半島じゅうに広めたのである。[略]

かくも長期に及ぶ包囲の間、戦闘の休止中でも、ギリシア人たちは手をこまねいてじっとしてはいなかった。様々な手段を用いて彼らは、包囲されていたトロイア人の一部、とりわけ上級ないし中級の高官たちを、自分たちの側に引き入れたのである。

要するに、包囲されているトロイア陣営の中に「親ギリシア」派を形成することに成功したのだ。[略]

「親ギリシア」のグループは、ギリシアとの和平を模索していた。一方で反対者たちは、後に残忍に処罰されることになるラーオコオンを中心として、戦争の継続を主張していた。[略]

「兵の一団をひそかに送り込むよりも、公式の使節団を送り込む方が、ずっとあり得る話ではないだろうか」ゲントは思った。

考えを整理してみれば、それは何かしら新しい発見であるように思われた。そうだ、使節団だ。この考えを補強するのが、メネラーオスの存在だ。彼はギリシアの指揮官の弟であるだけでなく、妻ヘレネーをめぐるあの一連の軍事行動に、初めから直接に巻き込まれていた人物でもあった。ヘレネーなら、彼らがどのような協定を結んだとしても、その補足事項にもとづいて身の安全を保証されただろう。[略]

それは、和平協定のための使節団でもあったろう。ホメーロスの語り伝えるところによれば、戦争末期の数ヶ月間、ギリシア側とトロイア側との間には、何度となく接触がはかられていた。ヘレネーの処遇をめぐる会談がおこなわれ、プリアモスはアキレウスに対し、息子の遺体の引き渡しを要求した。双方にとって、それほど受け入れがたいことではなかったはずだ。

実際の『イーリアス』第22～24章によれば、トロイア王プリアモスの息子ヘクトールはアキレウスと戦って殺される。ヘクトールはいまわのきわに自分の遺体を父に引き渡すよう懇願するが、アキレウスは聞き入れず、遺体を馬車にくくりつけて引き回す。プリアモスは神々に導かれて深夜アキレウスの幕舎を訪れ、莫大な黄金を渡して息子の遺体を引き取った。明らかにカダレはこの箇所を念頭に置いている。

## 2.2. 主人公の結論

前節で列挙した論点にもとづき、ゲントは一つの結論を導き出す。それは、非公然の策略による「木馬」も公然かつ平和的な「和平使節団」も同時に存在し、いわば車の両輪のようにトロイア攻略の軸となっていたというものである。少し長いが、できるだけそのままの形で引用する。

「木馬は存在し、かつ存在しなかった」

これはどうやら真実らしく思われた。木馬は存在した。しかしそれは、ホメーロスが語り伝えたようなものではなかった。彼〔訳注；ゲント・ルヴィナ〕は改変を加えたのである。

「それは空っぽだった」

使節団は最初から存在した。「木馬」も使節団も同時に存在した。作戦行動は両面から行われたのだ。

〔略〕それは、全ギリシア市民の名誉に関わることだった。

何十もの国家や民族が二つの敵対する勢力に分かれて対決するという、正真正銘の、それもおそらく地上で最初の世界戦争がおこなわれている状況下では、締結されて間もない和平協定を不実にも踏みこむということが、国際世論を目の前にしたギリシアにとって恥ずべき汚点となるのは明らかだった。このような汚点を残してしまったら最後、ギリシアとの間に様々な同盟関係や協定を結んでいるあらゆる国々は、ギリシアの和平蹂躪を、道義にもとるものだと好き放題に言い立てるだろう。そうなればギリシアの政治的地位は全面的な危機に陥ることになる。

そればかりではない。忘れてはならないことだが、ギリシア人は自分たちのことを「世界の太陽」だとか、「民主主義と文明社会のチャンピオン」などと称していた。それは事実だった。そのギリシアがかような不誠実を為したとあれば、万人に対してのみならず、何よりもまずギリシア市民に対して、とりわけ道德教育に最も重きを置くべき若い世代に対して面目が立たなくなってしまう。[略]

トロイア。三千年前。スカイア門。昼。ギリシアの使節団はトロイアに入り、城壁の外では「木馬」の建造が始まっていた。同じ頃、ギリシア軍が祖国へ帰還するかも知れない、という話が広まった。[略]

トロイア市内での会談は困難を抱えていた。外では「木馬」が完成間際だった。使節団と「木馬」は、この時点では離れ離れに存在していた。木馬は単なる贈り物で〔略〕ギリシア

がトロイアへ置いてゆくつもりなのだ、という噂が飛び交っていた。[略] スポークスマンはこう言ったかも知れない。

「緊張緩和の機は熟した。トロイアもこれをさらに推し進め、この『雪どけ』<sup>14)</sup>を象徴する贈り物を受け取るのではないか」[略]

ラーオコオンもその熱狂の只中にあった。彼はこの和平協定にトロイアの不運を見ていたのだが、彼に同調する者は確実に減っていた。事態の流れを速めようとするかのように、ギリシア軍は本当にトロイア周辺の幕屋を放棄し始めた。[略]

トロイア人たちは「木馬」に近寄ると、適当な側板を引き剥がして内部を覗き（『木馬』だから空っぽに決まっているのだが）、これをどうすべきか命令を待った。そして上からの命令は届いたが、これがどうもはっきりしないもので、あれこれと異論が錯綜したが、それもさほどの時間はかからなかった。同じ頃、きわめて不可解な状況下でラーオコオンが死亡した。[略]

トロイア人たちは、もう一度「木馬」の内部を調べた後で、市の城門の一つからこれを引き入れた。たまたま「木馬」の高いところが城門よりも手のひら二つ三つ分ばかり高かったので、市内へ入れるためには城門のアーチ状の部分を少し壊さなければならなかった。それで城門の骨組みが弱くなっただろう。ひょっとしたら、わざとそうしたのではないだろうか？ [略]

ここで「木馬」は神話が示す通りの道筋にほぼ近付いてきたわけだが、唯一の変更点は、その中身が空っぽだったということだ。

ついに「木馬」は市内に入った。使節団はその頃、会談を早々と切り上げようとしていた。文書と印章が用意され、双方の官僚らが、条約の文言を最後にいま一度確認していた。使節団と「木馬」の両者がトロイア市内に居合わせるようになった。中核にあたる部分と外側とが、ようやく一つに合わさったわけだ。事態は終局を迎えつつあった。[略]

和平文書や諸々の協定、捕虜の交換、海路に関する相互協約、ヘレネー問題等、諸々の調印が済むと、使節団はようやくトロイアをあとにした。[略]

夜になると、ギリシアの艦隊はその見事な操船技術で手早く引き返してきて、トロイア近郊に兵を上陸させた。そして

「メネラーオスやオデュッセウスらは、城門を開けさせるべく、木馬の体内に隠れてトロイア市内への潜入をはかったそうだ」

との報を伝えて兵たちの士気を喚起し（そういえば、これら指揮官たちの姿は先程からギリシア軍勢の中に見当たらない）、おぞましき最後の決戦へと彼らを駆り立てた。

これこそが、トロイアを陥落させた攻撃である。実際、その城門が開いたのは内部の誰によるものでもなく、戦闘の混乱の中でそうなったのだ。かような些細なことに気付くものなど、誰一人としていなかったのだから。ギリシア兵たちは激昂してこの憎むべき都市に襲いかかると、てっぺんから土台に至るまで、すっかり平らにならしてしまった。その流血の只中で、特別な命を受けた何者かによって、和平会談に関する記録文書は灰燼に帰してしまっただのである…

ここに現れる「二つの勢力」、「国際世論」、「雪どけ」といった表現、「民主主義と文明社会」の盟主たる体裁や「国民道徳」に固執する超大国の姿などは、むしろ今日の読者にこそ馴染み深いのではないだろうか。そこには1960年代のアルバニアのみならず、作品が完全な形で世に出た1991年代当時の世界の動きが反映されている。なおラーオコオンの「不可解な死」なるものについては、後の章で取り上げる。

### 3. 現代の「トロイアの木馬」

#### 3.1. 虐殺の夢想

その頃、郊外のトラックの中では「木馬の設計士」が「ティラナ陥落」を夢想しているのだが、なぜかその内容はゲントが描き出した「トロイア陥落」とよく似ていた。というよりそれ以上に古典的な「トロイア陥落」そのものだった。違うのは、彼らの望む破壊と殺戮がティラナ市内<sup>15)</sup>で行われることと、マックスが自分を裏切った婚約者レナ（ヘレナ）の殺害に成功す

ることぐらいである。

広い交差点にたどり着いたところで、木馬からどれだけ離れただろうかと振り返ったその時、彼〔訳注；「設計士」〕は最初の炎を目にした。それは、空港のある方角から立ち上っていた。ラジオ局の大きな建物が炎上しているようだった。「始まったな」と彼はつぶやいた。〔略〕さらに歩いていくと、今度は右手の方角に炎が見えた。首相官邸だ。やがて四方八方から火の手が上がり始めた。〔略〕

彼は先へと進んだ。今度はそこいらじゅうが燃えていた。国営銀行の建物も、靴工場も、国立図書館も、大きいホテル「ツーリズム」も。大通りの突き当たりまで来ると、炎は鉄道の駅を覆い尽くしていた。随分と遠くまで来たので、振り返ってみると、木馬も炎に包まれているように見えた。彼は、もと来た道を歩いていった。〔略〕

彼は町の中を歩きながら、燃えさかる郵便局の巨大な建物に彫られたレリーフを、これが見納めと記憶に残しておこうとした。いつも木馬のひび割れの間から、はるか遠くにそびえる美しい建物を、彼は見つめていた。ガラス張りの正面入口が太陽の光の下で輝いていた。今はそこに、紫色の炎が舞い踊っている。

炎の間から「電信電話」をあらわす「PTT」〔訳者注；アルバニア語の略〕の大きな文字が見え隠れしていた。彼にはそれが「PIETA」〔訳者注；イタリア語『哀れみ』〕と書いてあるように見えた。〔略〕

大学の正面階段のところで、『設計士』は、マックスが誰かの髪の毛を引っつかんでいるのを見た。彼の片手には古びた槍が握られ、もう片方の手には、ふさふさとしたブロンドの髪の毛が輝いていた。〔略〕

マックスはヘレナを女子寮から引きずり出したらしい。そして今、彼女の身体は大理石の階段の上でもがいていた。彼女は彼に白い胸をはだけてみせて、許しを乞うていた。

「マックスは言っていた。『たとえ白い胸をはだけてみせても、俺は彼女を許さない』と」

実際に、ティラナ空港を起点にすると、西側から市中心部<sup>16)</sup>に入ることになる。そこから南北に伸びる大通りを北（駅・空港方面）から南（大学）に向かって歩くと、ほぼこの描写通りの順でそれぞれの建造物が視界に入ってくる。このように作中人物に（実際の）ティラナの景観に他の「何か」との相似を発見させる描写は、前作『死せる軍隊の將軍』から既に見られる手法であり、その後の作品にも頻繁に現れる。

### 3.2. 幸福の散歩

ところが上述の描写の直後には、主人公гентとレナが同じ市内のほぼ同じ経路をたどってデートしているのだ。美術館で古代エジプト文明を語り、レストランで食事を楽しみ、結婚後の新居を見るなど、その光景は先ほどの「木馬の設計士」の夢想する惨状とは雲泥の差である。だがそんな恋人との語らいの中でも、гентはホメーロスやウェルギリウスを語り、社会主義陣営の「団結」にほの見える亀裂の予兆を感じている。目に入る風景の随所には何故か「ティラナ陥落」のイメージが重なる。例えば次のくだり。

「見て」中央広場に出たところでレナが話しかけた。「郵便局が燃えているみたい」

冬の弱々しい陽の光は衰え始めていたが、郵便局の建物の大きな窓ガラスに反射して、狂気じみた炎が乱舞しているようだった。

「本当だ、まるで火事みたいだ」гентは言った。

レナはひとしきり我を忘れた様子で、まるで、その炎をどこかで見たことがあるかのように見入っていた。

はるか3000年以上前のトロイア滅亡と、「設計士」の夢想するティラナ壊滅と、гентとレナが目にする平和な（だがどこか不安な）ティラナ、それらがぼんやりと重なり合っていく。



#### 4. 『怪物』におけるホメーロスの謎

##### 4.1. メネラーオスの焦燥 交錯する時空

гентとレナの幸せな（しかしどころなく不安げな）散歩に続いて、物語の舞台は唐突に古代エーゲ海にジャンプする。最初は、トロイア戦争も終結し、帰国したメネラーオスの邸宅。長い冒険と戦いの果てによりややく妻ヘレネーとの生活が戻ったのに、なぜか彼の気は晴れない。他の男たちとの不義を見逃してまで救い出した<sup>17)</sup> 妻が、男友達との雑談に屈託なく笑うさまを見るたび気が滅入るばかり。むしろ若返り好色を増す妻と、それに翻弄されながら抜け毛に自分の老いを感じるメネラーオス。彼の漠然とした不安は、自分より「あの男」の方が妻を満足させていたのではないかという疑惑となって噴き出す。

「最初『あの男』[訳注；パリス]に連れて行かれたのは、どこの島だ？」  
「それはもう言ったでしょ…よく憶えてないのよ」[略]  
「ならその後の宮殿では？宮殿だよ、トロイアの。ずっと良かったんじゃないのか？[略]  
そこでお前は『あの男』と最初の絶頂を経験したんだろう？」  
「…そうよ」沈黙があった。  
「でも、それは滅多にないことだった。あの人は、私の不感症ぶりをずっと嘆いていたわ…」  
[略]  
「ふむ…だがデーイボボス<sup>18)</sup>となら別だった…ずっとたくさん愛し合った、そうなんだろう？」

カダレの作品世界に現れるメネラーオスはトロイア戦争の英雄ではなく、自身の肉体の衰えに焦りながら妻に嫉妬の炎を燃やすただの中年男である。おまけに戦友アガメムノーンは妻に殺され<sup>19)</sup>、オデュッセウスは帰国途中で行方不明と、周囲にはろくな話がない。そんな古代ギリシアの中年夫婦の会話は、すぐさま次の章でгентとレナの（友人たちとのパーティの席での）会話にびたりと重なっていく。

「今まで訊いたことがなかったけど、『あの男』[訳注；レナの婚約者]との肉体関係のことなんだ…君が僕に話してくれたのは、冷たい男だったということだけで…それで、こんなこと訊きたくはないんだけど…ただ、君がちゃんと満たされていたのか、それだけが知りたくて[略]」

興味深いことだがここでは、本来「女を奪った」パリス或いはデーイボボスの存在だったгентと、「奪われた」側であるはずのメネラーオスの立場が重なり合っているのである。

##### 4.2. ラーオコオーンの粛清

メネラーオスに続いて、ラーオコオーンが舞台に立ち現れる。伝承によれば、トロイア市民の中で木馬の搬入に反対したのはラーオコオーン（とプリアモスの娘カッサンドレー）だけだった。しかし女神アテーネーがラーオコオーン目を潰し、さらに海から大蛇が現れて彼の息子2人を絞め殺したので、民衆は（神々の怒りを恐れて）ラーオコオーンの意見を聞かず、木馬を市内に引き入れることになる。

ところが、こうしたエピソードもカダレの手にかかると途端に生々しい「権力闘争」に姿を変えてしまう。かねて目をかけてもらっていたはずの王プリアモスには「今回はそうはいかないのだ、ラーオコオーンよ」と見放され、会議ではやんわりと無視され、対ギリシア交渉の停滞は全て彼のせいとされ、司法機関には頼んでおいた調査を先延ばしにされ、さらには彼を誹謗

する匿名の怪文書まで出回っている。

〔略〕いわく、私が和平反対派だとか、トロイアの内紛の元凶だとか、その他、その他。書簡の中では私の辞任も要求されていたが、それはまだましな方だった。それ以上のことが要求されているような感じだった。何らかの裁判とか、投獄とか。いやそればかりではない、死刑も含まれているだろう。

神話世界でラーオコオーンを苦しめるのは神々だが、カダレの世界では人間たちがそれをする。それも極めて近代的に。彼はさながら「党内少数派」のごとく、たとえ良心的な発言も悪意に解釈され、孤立させられ、あげくに家族までが迫害の対象となる。

家に戻ると子供たちが泣いていた。学校を追い出されたという。理由は同級生との喧嘩だった。相手はこう言っただけ。「お前の親父は、トロイアの国益を損なう裏切り者だ」

取っ組み合いになるには十分な理由だった。私は担任教師を呼んで事情を聞いた。教師は目を伏せたままだったが、ようやく事実を認めた。

「上からの指示がありまして」

こうした描写の中に、現代の全体主義国家に見られる巧みな弾圧のありようを見出すのは、じゅうぶん容易なことだろう。ちなみに「蛇」も登場するが、それは大海蛇どころか小さな蛇2匹で、しかも他ならぬラーオコオーンがギリシアのスパイを恐れて玄関に放しているに過ぎない。神の差し向ける蛇より、ただの人間の方がよほど恐ろしいのだ。

#### 4.3. スレモフの死

この作品にはスレモフ (Thremoh) という未知の詩人が登場する。その名はトロイア陣営でのラーオコオーンに対する糾弾の中で初めて明らかになる。

私をトロイア側の代表団長から解任するという勅令が出たのは、夜明け前のことだった。続く攻撃は昼になって、政府の会議の席で、それも思わぬ方向からやってきた。スレモフの問題だった〔略〕トロイアで一番の詩人にして『ユーリアス』の作者が、ヒッタイトへ逃亡したのだ〔略〕

この名は明らかにアナグラムである。アルバニア語Homerに縮小辞thをつけるとHomerthであり、これを逆にするとThremohとなる。『ユーリアス (Ylliada)』は、アルバニア語ylli (星) とIliada (イーリアス) を組み合わせた造語であるから、このスレモフなる人物は否応なしにホメーロスを連想させる。<sup>20)</sup>

ところで、『イーリアス』で語られる世界の中に『ユーリアス』が登場する時点でじゅうぶん気付くことだが、そもそもゲントの空想中にあらわれる「トロイア」も、我々が知っている史実上の、或いはギリシア・ローマ文学中にあらわれるトロイアとどうやら同一ではないらしい。トロイアの歴史的別名は「イーリオン」だが、『怪物』の中では「ユーリオン」<sup>21)</sup>と微妙に違う名で呼ばれている (Yllijonはアルバニア語ylli jonë「我らの星」と、ギリシア語のIlion (Ἰλιον) をかけた造語)。

ラーオコオーンの主張によれば、スレモフはトロイア当局の許可を得て出国し、ヒッタイトの保護下で『ユーリアス』の粘土板への転写 (楔形文字への翻訳!) に従事していた。ところが対ギリシア情勢が変化した途端、当局の解釈は逆転し、スレモフ自身の「国外逃亡」だったことにされてしまうのだ。

蔵相が私の言葉をさえぎった。

「スレモフの逃亡は、彼に対する疑いが正しかったことを示している。彼は何度も批判されてきたではないか。彼は詩の中で、我らの敵ギリシアへの断固たる怒りを表明するどころか、全く逆のことをしてきたのだ」

私〔訳注；ラーオコオン〕は蔵相に答えた。

「それは、我々のような政治家が口出しすべきではない芸術の問題だ」

議場は再び騒然となり、私は前にもまして空虚な感覚に襲われた。

「白」が「黒」に変わり、「同志」が「敵」に変わった瞬間である。かくしてラーオコオンは自宅に幽閉される。自分をかやの外に置いた状況でギリシアとの和平交渉が「順調に」進む中、ラーオコオンは自らの国外追放を恐れながらスレモフの身を案じる。ところが結末は彼の想像をはるかに上回る悲劇だった。

実は、スレモフはそれから69日後に死んだのだ。しかしラーオコオンも、そしてトロイアの誰一人として、彼が最期を迎えたことをまったく知らなかった。それは、トロイア自体がその前に死んでいたからという、しごく単純な理由によるものだった。〔略〕

スレモフはヒッタイトに着いた時既に病におかされていた。身内の者たちとの別離に対する絶望感、祖国の運命に対する不安、自分の行為に対する疑念といくばくかの後悔の念、それらが彼を完膚なきまでに打ちのめした〔略〕

しかも「粘土板を用いるのは主に外交上の書簡や声明のため」と思い込んでいるヒッタイト人たちは、スレモフの制作意図を理解しようとしな。トロイア特使の説得でようやく通訳と秘書が用意されるが、

スレモフはそのことに何ら喜びの様子を見せなかった。うつろな目で彼は粘土板を見つめるだけで、その全身には、顔といわず髪といわず手といわず、際限のない苦悩があるばかりだった〔略〕時折、何かを口にしようとするかに見えたが、顎に震えが出てそれを妨げるのだった。まるでそこに口枷を嵌められてでもいるかのように。

自らの内面的苦悩と周囲の無理解にさいなまれながら、スレモフはほとんど作品を手がけることもできずに息を引き取る。『トロイアにとっては残念なことになるだろう、だがもう遅い、何もかも手遅れだ』で途切れた数十枚の粘土板は、ヒッタイトの滅亡と共に散逸し、ティムール侵攻時に馬の脚に当たって割れ、さらに数百年後に数千枚もの行政文書に紛れて発掘され、解読にあたった研究者たちを悩ませることになる。

## 5. 消えない不安

ゲントはレナから妊娠の報告を受ける。彼が未来へのほのかな希望を抱きかけた時、空想の小アジア世界と現実の1960年代アルバニアが交錯する作品世界は、郊外で発生した殺人事件をきっかけに終局へと動き始める。事件の真相は最後まで明らかにされないが、博物館勤務の元婚約者がレナと間違えて（よく似た髪の）別の女性<sup>22)</sup>を殺してしまったことが暗示されている。

その傷は確かに尋常なものではなかった。大きくて真っ赤な、あちこちに裂け目が広がった傷跡だった。それは日没時の、周囲に幾本もの赤い光線を放ちながら沈む太陽のようだった。

「どんな凶器を使ったんだろうね、一体全体？」警察署長が訊ねると、検死医は肩をそびやかした。

犯罪対策課の担当官はもう一度、犠牲者の上にかがみ込んだ。

「たぶん、博物館ものの古い武器だろうな」

一方、郊外に放置された有蓋トラックでは、「アカマース」が陰惨な死を遂げる（自殺の可能性が示唆されている）が、それでも彼らは傾きかけた「木馬」から去ろうとしない。「マックス」は自分を裏切った婚約者レナを殺害したと目を血走らせて豪語するが、それが「人違い」だったことには最後まで気付かない。

その頃、гентはレナと出かけた郊外の平原で「古ぼけたトラック」に遭遇する。ふと空き瓶を拾い上げ無人（？）のトラックに投げつけた<sup>23)</sup> гентは、不意に異様な幻想に襲われる。

彼は果てしない平原の真ん中に、ただ一人だった。地平線の向こうから恐ろしい蛇どもが姿を現し、自分を罰しに来るように思われた。それらが地を這って自分の方へ向かってくるのに、硬直して動けない。彼は遠くから響いてくる咆哮の中で、ラーオコオーンの大理石像と化しつつあった。ルーヴル、ロンドン、マドリッドの美術館で、絶え間なく押し寄せる観覧者や観光客たちに取り囲まれて…その声と視線と、カメラのシャッター音が辺りを取り巻いていた。

平原で花を摘むレナの声も耳に入らず、自分自身がパリからメネラーオス、そして今やラーオコオーンの立場に移し替えられるヴィジョンにгентが立ち尽くす中、物語は幕を下ろす。空想と現実、或いは過去と現在の世界を覆う漠然とした不安は——あたかも地平線から長い首を伸ばし不気味な沈黙の中でたたずむ薄暗く巨大な木製の馬のように——最後まで消えることがない。たとえ主人公гентに恋人レナとの幸せな家庭生活が約束されているとしても、である。

最初の雑誌発表時はアルバニアの戦後政権樹立から20年足らず。「社会主義建設」のため民衆動員を進めていた当時の党指導部がこうした「ややこしい」作品を好意的に評価するわけにいかず、さりとて「微に入り細を穿つ」批判も出来ず、はっきりしない経緯で発禁にした理由も、おのずと察せられる。実際、先行する研究のほとんどがこの作品の中に全体主義特有の「恐怖」「不安」、そしてそれらを具現化する「恐怖の装置」(Kuçuku 2005, 309)を見ているのだが、これについては既に作中人物たちが雄弁に語っている。

国家、あるいは一団の軍隊が、不安や屈従や恐怖を生み出すこともできるだろう。(гентの独言)

だが俺が作り上げたのは、天才的作品だ。現実と夢、かりそめと永遠のはざまにある作品だ。自分が作った木馬こそ、その足で神話の世界に立ち、その頭を現代世界へと向けた機械だ。それは、あらゆる時代、あらゆる世代の人々に適応し、恐怖をもって作用することのできる、恐怖の機械なのだ。力学の法則に従いながら、あらゆる世紀にそびえ立ち、また移動していくのだ。必要とされればどんな時にでも、まつろわぬ人々や街々の地平線上に突如その姿をあらわして、威圧し、人々の意識に影を落とし、その心に絶え間ない疑心と畏怖と不安を抱かせるのだ。(『設計士』の独言)

「そういうことはたぶん、私たちの頭の中にひそかに入り込み、浸透していくんじゃないかしら。昔の人たちが考えていたように、夢というのは神々たちが、眠っている人間の頭の中に流し込むのよ [略] 不安だらけだわ」 [略]

「君は『不安だらけだ』って言うけど、いいかい、不安の創造というのは、どんな秩序も第一に注意を傾けてきたことのひとつなのさ。武器や手錠を製造することだけでなく、それも重視されているんだよ。スフィンクスを見てごらん。ファラオの警察は、民衆がその神秘的な姿を見て畏れるように仕向けたんだ、それ以外のことがあると思うかい？」(レナとгентの会話)

本稿冒頭で、『怪物』はその後の諸作の「プロトタイプ」とであると述べたが、上に引用した箇所からだけでもそのことを具体的に示すことができる。天上人による夢の「注入」という着想は短編『凶夢』(1991)、さらには舞台をオスマン帝国に移して『夢宮殿』(1995)に、ファラオの全体主義という着想は『ピラミッド』(1993)に、そしてアガメムノーンをめぐる着想は、実際の政治的事件<sup>24)</sup>を土台とした2部作『アガメムノーンの娘』『後継者』(共に2003年 ただし執筆時期は1980年代)に結実している。「片足はホメーロスの戦慄の中に、もう片足は傑出した現代性の中に」(Kuçuku 2005, 310) 突っ込んだ『怪物』には、その後の「カダレ的 (kadarean)」要素が凝縮されており、その点からも読まれるべき作品なのである。

付

本稿は、2008-2009年度大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学 国際研究教育拠点」研究プロジェクト「ヨーロッパ/非ヨーロッパ——東欧の現代文学」による研究成果の一部である。

注

- 1) 戦後アルバニアの対外関係の変遷については、拙稿(井浦2007)を参照のこと。
- 2) 特に当時の最高指導者だったエンヴェル・ホチャ(Enver Hoxha)党第一書記とは同郷で、私的にも親交があった。そのことが、彼が当局から致命的な弾圧を受けずに済んだことの一因であったとも言われている。無論、既に国際的名声を博していた自国作家を安易に弾圧できなかったという事情もある。
- 3) ただしフランスにも活動拠点があり、彼の作品はフランス語圏で最も多く(ほとんど全て)翻訳出版されている。また彼自身「アカデミー・フランセーズ」の会員でもある。
- 4) 当時「アルバニアのエフトゥシェンコ」と称する評もあった(エフトゥシェンコはロシアの詩人。その作品がショスタコヴィチの交響曲に取り入れられていることでも有名)。イタリアではマルチェロ・マストロヤンニ主演で映画化(1982)されている(アルバニアでも1989年に映画化)。
- 5) 実は、アルバニアの作家でカフカになぞらえられるのはカダレだけではない。ドリテロ・アゴリ(Dritëro Agolli 1931~現在)は、その作品にあふれる独特のユーモアと諷刺ゆえに「少しだけ日当たりのよいカフカ」(仏紙「フィガロ」の評)と呼ばれる。外国での知名度は高くないが、少なくともアルバニア語圏ではカダレと双壁を成す存在。『メモ人民委員』『同志ズエロの栄光と没落』『母なるアルバニア』『裸の騎士』など小説、詩多数。パルティザン経験者で、アルバニア国会の長老議員でもある。
- 6) アルバニアに伝わる復讐の因習を描いた『砕かれた四月』は、舞台を現代ブラジルに移して映画化されている(「ビハインド・ザ・サン」ウォルター・サレス監督、ロドリゴ・サントロ主演、2001年)。
- 7) 発禁理由は今も不明だが、「あらゆる政治的ほめかしを嫌った当局の意向による」(Elsie 1997, 388)と言われる。また全集版の解説(Éric Faye)では、当局がこの作品を「アヴァンギャルドかつデカダント」なものとして否定的に判断していたとの記述がある。
- 8) コソヴォ版では「木馬」に潜む男たち(本文後述)の描写が中心で、主人公ゲントに関する(特に心情面の)記述はほとんどない。
- 9) 2007年末時点で、フランス、ギリシア、ポーランド、スペイン、スウェーデン、トルコ、ルーマニアの7言語による翻訳が存在する(『死せる軍隊の將軍』は28言語)。ちなみにカダレの日本語訳は2008年9月現在、下記5作のみである(全て仏訳からの重訳)。中国語や韓国語でもカダレの翻訳は多数刊行されており、既に日本語訳の出版点数を上回っている。  
『砕かれた四月』(平岡敦訳)白水社、1995  
『草原の神々の黄昏』(桑原透訳)筑摩書房、1996  
『誰がドルンチナを連れ戻したか』(平岡敦訳)白水社、1994  
『夢宮殿』(村上光彦訳)東京創元社、1994  
『災厄を運ぶ男』(平岡敦訳)(『世界文学のフロンティア3』岩波書店、1997 所収)
- 10) 「オデュッセウス」「アカマース」はメネラーオスと共にトロイアに赴いた英雄の名。一方、「マッ

クス」「ロベルト」「ミロシュ」は現代名で（アルバニア人にもなくはないが）いささか多国籍の趣さえ感じられる。またトラックの中にアムネスティ・インターナショナルへのプレス向け文書がある点から、「反体制グループ」の可能性も垣間見える。「設計士」はトロイア戦争で木馬を設計したエペイオスのこと。

- 11) クイントゥス（Quintus）は3世紀頃の詩人。スミルナ（現トルコのイズミル）出身であることから、「スミルナのクイントゥス」とも。その作『トロイア戦記』では、『イーリアス』や『オデュッセイア』で明らかにされなかったトロイア戦争の様々な側面が語られている。後代の作家によるトロイア戦争の「続編」「語り直し」の例としてはウェルギリウス『アエネーイス』やアイスキュロス『アガ멤ノン』が有名だが、その他コルネリウス・トリピオドローソスの『ヘレネー誘拐』なども挙げられる。
- 12) このように、一方で現実のアルバニア社会全体の変動を描き、また一方で主人公とその周囲のこまやかな人間関係（主人公と恋人という図式が最も多い）に焦点を絞り、やがて二つの流れが縦糸と横糸のように複雑に絡み合っていくというスタイルは、大作『大いなる冬』や最近作『アガ멤ノンの娘』など、後のカダレの作品に頻繁に見ることができる。
- 13) 『イーリアス』で、開戦前の交渉に赴いたオデュッセウスらを歓待したアンテノールをさす。また、後にウェルギリウス『アエネーイス』の主人公となるアイネイアースもトロイアを逃げのびている。
- 14) アルバニア語の原文ではフランス語の名詞“dégel（雪どけ）”をそのまま用いており、執筆時の現実世界で進行していた「冷戦」を想起させる。
- 15) この時ティラナの映画館では「アガ멤ノン」と題する（架空の）映画が公開されているが、市内に侵入した彼らは、広告看板のアルバニア語をなぜか理解することができない。「木馬」に潜む男たちと市民の生活に大きな断絶が生じていることを示唆している。
- 16) 実際のトロイア遺跡図を見ると、木馬が入城したスカイア門もトロイア市の西側に位置し、城門をくぐると王宮から広場へほぼ北南に伸びる空間があったようである。
- 17) メネラーオスはトロイア市内でヘレネーを発見、殺そうとするが思いとどまる（実は直前に女神アプロディテーが彼の心から憎悪を取り去っており、「殺すふり」でしかなかったのだが）。ちなみにこの時メネラーオスを思いとどませたのが、アイスキュロスの悲劇にも登場する兄アガ멤ノンである。
- 18) デーイポボスは兄パリスの死後、パリスの妻だったヘレネーを引き取った。
- 19) アガ멤ノンはトロイア遠征時、旅の安全を祈って女神アルテミスに「今年生まれた最も美しいもの」を生贄に捧げると誓った。ところがその年に長女イーピゲネイア（次女はエーレクトラー）が生まれたため、彼女を見合いと称して呼び寄せ、殺して犠牲に供した（アルテミスが、彼女を憐んで牝鹿とすり替えたとする伝承もある）。そのため彼は妻クリュタイムネーストラーに怨まれ、殺害された。ただしこのエピソードはホメロスではなく、後代のトロイア戦争譚の中で形成されたものである。
- 20) ホメロスにも小アジアのスミルナ（現トルコのイズミル）出身説がある。
- 21) 作中、гентが古代バルカン地名イリュリア（Iliria）とアルバニア語の「ユリ・イ・リ（Ylli i ri『新しい星』の意）」をかけあわせて「イーリオン」「ユリヨン」「ユリ・ヨネ」とメモする場面がある。そこから彼は「トロイア」の名を「古くから信じられている通り」ギリシア語の「イーリア」からではなくアルバニア語「ユリ・ヨネ（Ylli jonë『我らの星』）」から派生したものと考え、同様に「イリュリア」の名を「ユリ・イ・リ」に関連付けようとするが、もちろんこれは文学上の話。ただこの着想は比較的良好に知られているらしく、考古学の学術書でも言及している例がある（Xhelaj 2008）。
- 22) この女性は物語中盤で、гентとレナが入ったカフェの隣客として既に登場している。
- 23) この箇所より前だが、謎の男たちが、トラックに空き瓶を投げつけた酔っ払いを殺そうと相談するくだりがあり、その記述とも重なるよう構成されている。
- 24) 1981年12月、エンヴェル・ホチャにつぐ政治局のナンバー2だったメフメト・シェーフ首相が死体で発見され、同時に「CIAとKGBとユーゴスラヴィアの多重スパイ」であったとして党を除名された事件。

参 考 文 献

- Çaushi, Tefik; *Universi letrar i Kadesesë*. Tiranë, Dituria, 1993.
- Çaushi, Tefik; *Kadare. Fjalor i personazheve*. Tiranë, Enciklopedike, 1995.
- Elsie, Robert; *Dictionary of Albanian literature*. N.Y., Greenwood, 1986.
- Elsie, Robert; *Histori e letërsisë shqiptare*. Pejë, Dukagjini, 1997.
- Hasani, Hasan; *Leksikoni i shkrimtarëve shqiptare 1501-2001*. Prishtinë, Faik Konica, 2003.
- Kadare, Ismail; *Përbindëshi*. Prizren, Vreber, 1990.
- Kadare, Ismail; *Përbindëshi*. Tiranë, Lidhja e shkrimtarëve, 1991.
- Kadare, Ismail; *Veptra 6*. Paris, Fayard, 1998.
- Kadare, Ismail; *Œvres complètes 6*. Paris, Fayard, 1998.
- Kadare, Ismail; *Përbindëshi*. Tiranë, Onufri, 2005.
- Kadare, Ismail; *Veptra 1*. Tiranë, Onufri, 2007.
- Kuçuku, Bashkim; *Kadare në gjuhët e botës*. Tiranë, Onufri, 2006.
- Uçi, Alfred; *Grotesku kadarean*. Tiranë, Onufri, 1999.
- Valtchinova, Galia; Ismail Kadare's *The H-File* and the making of the Homeric Verse. in: Schwandner-Sievers, Stephanie & Fischer, Bernd (ed.); *Albanian Identities. Myth and History*, London, Hurst & Co., 2002, 104-114.
- Xhelaj, Vladimir; *Në origjinë të kombit shqiptar dhe të gjuhës së tij*. Tiranë, 2008.
- 井浦伊知郎「南東欧現代史副教材におけるアルバニアとアルバニア人——CDRSEEワークブックに見る多面的アプローチ——」『広島文教女子大学紀要』42号, 2007, 83-98.
- 井浦伊知郎「Ismail Kadareにおけるホメーロスの解釈——小説『怪物』に見られる「トロイア陥落」——」『プロピレア』17号, 2005, 33-44.
- 平岡敦「“周縁”からのメッセージ——イスマイル・カダレ」『現代ヨーロッパ文学の動向 中心と周縁』中央大学出版部, 1996, 287-299.
- クイントゥス（松田治 訳）『トロイア戦記』講談社, 2000.
- 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店, 1960.
- コルーツ／トリピオドーロス（松田治 訳）『ヘレネー誘拐・トロイア落城』講談社, 2003.
- ホメーロス（呉茂一 訳）『オデュッセイア』岩波書店, 1971.

—平成20年10月31日 受理—